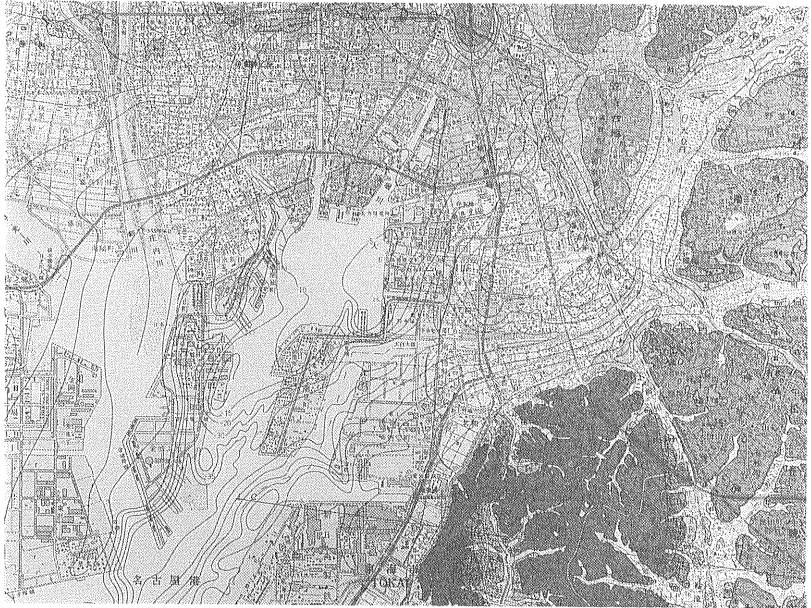


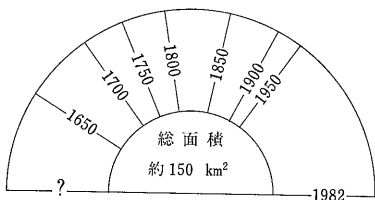
「年魚市(あゆち)潟
潮干にけらし 知多の浦
に 朝漕ぐ舟も 沖に寄
る見ゆ」(万葉集 巻7
磯(き)旅の歌). 1000年
の昔 熱田台地の南端に
立って古人が歌った面影
は今はない. 舟人が避
けて通った干潟も広大な
臨海工場群に変貌してい
る. そして 振り向け
ば名古屋市街の家並み.
「名古屋北部」に続くこ
の地質図幅も 市街地地
質調査のやり難さを十分
に味わせてくれたもの
である.



「名古屋南部地域」は
地質構成としてははなは
だ単純である. 地域の
東部1/3は台地・丘陵地
で 鮮新統・更新統が発達する. 鮮新統より古い地層は 地
表では見られない(地下では中・古生層や中新統の伏在が知ら
れている). 丘陵地の鮮新統(矢田川累層)については この
図幅では 尾張丘陵と大府・知多丘陵とに分けて記載してい
る. それぞれ下部の砂・シルト互層と 上部の砂礫・シルト
互層とに区別されているが 尾張丘陵では砂礫・シルト互層が
大府・知多丘陵では砂・シルト互層が顕著に発達しており 総
体的には尾張丘陵の方が上位の層準が示すと考えられている.
鮮新統は 丘陵地内ではきわめて緩い傾斜を示すが 縁辺部で
は急斜して撓曲帯を形成しているのがこの地域の構造的な特色
である.

更新統は 尾張丘陵の唐山層・八事層 それらと対比される
大府・知多丘陵の加木屋層 台地を構成する熱田層・碧海層と
その相当層 さらに大曽根礫層と低位段丘層とに区分される.
砂層を主とした熱田層を除いて 大部分は礫層を主としてい
る. 八事層は 名古屋市東部の丘陵地に広く分布してケスタ
状の地形を作っており 加木屋層は 名和一加木屋撓曲に加わ
っている. 熱田層や碧海層は 最終間氷期から最終氷期前半
にかけての瀕海成堆積物である.

図幅地域の西2/3は広大・低平な濃尾平野の南端である.
ここでは 海水準以下の干拓地と最近の埋立지가 平野の半分
以上を占めている. 説明書の第4図(p.4)から 土地造成の
進展状況をグラフ化してみると下図のよう 特最近30年間
のすざまじい勢がうかがわれる. また 50年ごとの進展にも



人為的な土地造成の進展

かなりの差がある. こうした変動が自然環境の変化に起因す
るのか 社会条件によるものか 一度確かめて見たいもので
ある. 平野地域の地質図幅では どうしても地下の地質状況
に触れざるをえない. この図幅でも 濃尾平野や熱田台地の
地下地質について 豊富なボーリング資料にもとずいて描かれ
た断面図を多数掲載し その概要を明かにしている.



5万分の1地質図幅の新刊

名古屋南部

NAGOYA-NANBU

5万分の1地質図幅 地域地質研究報告



著 者 坂本 亨・高田康秀・桑原 徹・糸魚川淳二
発 行 工業技術院 地質調査所
取 扱 先 東京地学協会 (03) 261-0809 262-1401
そのほか全国主要書店
販売価格 1,840円

地 質 ニ ュ ー ス	第 387 号	11 月 号
昭和61年11月1日	定 価 ¥ 630	〒 実 費
編 集	発 行	
発 行 人	工 業 技 術 院 地 質 調 査 所	
発 行 所	林 久 雄	
	株 式 会 社 実 業 公 報 社	
	東 京 都 千 代 田 区 九 段 南 4 の 2 の 12	
	〒 102	
	Tel. (03)265-0951(代表)	
	振 替 口 座 東 京 1-32466	
総 発 売 元	株 式 会 社 実 業 公 報 社	
	出 版 事 業 部	